

〔魂の配慮〕

蛇のように聴く、鳩のように柔和に⁽¹⁾

山崎 和明

聖句（マタイによる福音書一〇章一六節、新共同訳より）

わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。

説教

「蛇のように聴く」と私が言っても、この世の人は、何一つ不思議に思いません。むしろこの世の人びとには「鳩のように柔和に」というアドヴァイスはなかなか難しく、実行できないと思う位です。ところがキリスト者にとっては、蛇のように賢くあることにはとても抵抗があります。しかしイエスは、あの不正な管理人の譬⁽²⁾で、「抜け目のない」やり方」をほめ、「この世の子らは、…光の子らよりも「賢く」振る舞っている」と語っています（ルカ伝一六章

八節)。ここが使われている「抜け目のない」、「賢く」というギリシャ語は、まさに蛇の聡さと同じ語です (phronimos)⁽³⁾。問題は、この智慧を神と人のために用いるのか、それとも己のために使うのかの違いにあります。本日の聖句は、私が語るような人間の言葉ではなく、イエス・キリストの言葉です。以下、イエスの教えの言葉を検討していきましょう。

「狼のまったく中に羊を送り込む」という表現は、マタイだけでなく、ルカもその福音書に記録しています⁽⁴⁾。しかし、「蛇のように賢く、鳩のように素直に」とは、マタイだけの特ダネです。これほど印象的に表現された譬えは、多くの人の心に長く留まることでしょう。とはいえ、人間世界の現実には、メルヘン的な動物の比喻以上にえげつなく、熾烈なものです。

イエス自身も、父なる神によってこの世の真只中に、つまりの狼の群れの中に、犠牲の小羊として派遣されました⁽⁵⁾。この地上に生まれ落ちた幼子イエスは、ヨセフとマリアの保護なしにはどうも生き延びることも、成長することもできませんでした。実際、イエスが生まれた当時、ヘロデは幼子キリスト・イエスの殺害を計って、二才以下の男の子すべてを虐殺した、と伝えられています (マタイ伝二章一六節以下)。ヨセフ一家は、幼子イエスを連れてエジプトに逃れ、かううじてその惨禍を免れています。そこには、神の守りや天使の支えに加えて、マリアとヨセフの「智慧と信仰」に助けられるところが大きかったです。そして今度、イエス・キリストが私たちをこの世に派遣する際に、促された注意がこれでした。

「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直にならなさい。」

この聖句には、狼、羊、蛇、鳩と四種類の生物がシンボリックに用いられています。以下一つ一つを検討していきましょう。

狼は凶暴です。群れになって襲いかかり、奪い散らします⁽⁶⁾。羊を盗み、食いちぎり、滅ぼします (ヨハネ伝一〇章一〇節)。穏やかで温かい羊がとる防衛策は、単純に危険から逃げ出す以外に能がありません。せいぜい追い詰められた羊が蹄を踏み鳴らしたり突撃したりして威嚇する程度です。それゆえ羊は、狼の格好の餌食、ターゲットになります。

聖書では、民（羊）を食い物にする「高位高官、役人、裁判官、偽預言者」が狼にたとえられています。⁷⁾

次に羊です。アベルが最初に供物として神に捧げ、神に喜んで受け容れられた「最良の」犠牲が羊でした。羊は、神に捧げられるほど淨い供え物になり得るのです。アブラハムが、雄羊をイサクの代わりに捧げたように（創世記二二章一三節）、聖書では、人はよく羊にたとえられます。人の子イエス自身も、羊にたとえられ、羊の中でも「犠牲の小羊」と称され、「世の罪を取り除く神の小羊」と呼ばれています（ヨハネ伝一章二九節）。そしてイエスは、小羊であると同時に、羊を牧する「大牧者」（ヘブル書一三章二〇節）でもあります。しかも「羊のために命を捨てるほど」の「善き羊飼い」（ヨハネ伝一〇章一一節）です。雇われ仕事の羊飼いは、狼が襲ってきたとき、羊を守らず「羊を置き去りにして逃げ」ますが、真の羊飼いは、自分の羊の声を聞き分け、羊を守るために命をかけて戦います（ヨハネ伝一〇章一二節）。

羊は口バのように強情ではなく、従順で温厚です。しかし、従うべき良き羊飼（指導者）がいなければ、「さまよい」で（ペテロ前書二章二五節）、愚かにも、群れをなして「自分勝手な方向にさまよう」（イザヤ書五三章六節）と表現されています。

「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」

既にお話ししたように、キリスト者は、悪魔の化身とも言われる蛇のように賢くなることに抵抗を覚えるのですが、鳩のように素直になることに何の躊躇もありません。いやそれどころか、キリスト者は往々にして、善良なクリスチャンであろうとして、神様以上に敬虔に振舞います。⁸⁾ それでは、抵抗の少ない、素直で柔和な「鳩」から見てゆきます。

聖書で鳩は、神の霊（マタイ伝三章一六節、マルコ伝一章一〇節、ヨハネ伝一章三二節）として顕れます。鳩は、清らかで、羊に代わる犠牲の捧げ物としても認められています。大洪水とノアの方舟の物語では、神との和解の、そして平和の象徴になっています（創世記八章）。そして鳩には、帰巢本能があります。どんなに遠く離れていても、自分の巣に戻ってくる本能があります。私たちも帰り着くべき本来の住処を知っているでしょうか。

また鳩は、警戒心がさほど強くなく、人間を信頼して、安心してか人間にも近づいてきます。しかし、これが鳩の柔和で素直な素晴らしところであると同時に、弱点でもあります。あるローマ・カトリックの司祭の話ですが、サンピエトロ寺院で、教皇と共に子供たちが放った純白の鳩が、すぐさま猛禽（カラスやカモメ）に襲われ餌食になる事態が起こったようです。

次に、蛇に移ります。蛇は創世記の初めから、黙示録の最期まで、悪魔やサタンの化身として表現されています。人間を除けば、聖書の最初に出てくる動物が蛇です。「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった」（創世記三章一節）と記されています。エデンの園に蛇が登場することによって、あたかも今創造された被造物の世界とその被造物の最高位にある人間をめぐって、神とサタンとによる支配の争奪戦が、すでにこの舞台から始まっているようです。

狡猾な蛇は、純粹無垢でナイーヴな、右も左も分らない、甘いも酸いもかみ分けられないアダムとエヴァを巧妙に欺き、神の命に背かせています。そして二人は蛇にそのかされて、食べてはならないと神から命じられていた禁断の木の実の一つである善悪を知る智慧の実を、食べてしまいました。そのため蛇はおぞましい、呪われた（創世記三章一四節）生き物と刻印されました。何の罪もないアダムとエヴァは、純粹無垢であるだけでは、蛇の誘惑に抵抗できず、神の戒めも守れませんでした。ここから人間に原罪が宿ったと言われます。^⑩

この世には、蛇のようにずる賢く、騙す者がいるのです。いえ、エデンの園の中にすら、すでに騙すもの、欺くもの、偽るものが入りこんでいるではありませんか。戒めを破ったアダムとエヴァは、それゆえ樂園から追放され、樂園を喪失しました。失樂園です。

この悪魔であるサタンを決してバカにはできません。私たち人間以上に神のことをよく知っています。イエスの伝道生活において、イエスが神の御子であると最初から知っているのは、天使を除けば、サタンです（「荒野の誘惑」を参照）。悪霊こそが、イエスがキリストであり、神の御子であることを一番よく知っていました。サタンは、アウグスチヌスやトマス、ルターやカルヴァン、そしてバルト以上に神のことを熟知しているでしょう。

悪魔の賢さや聡さを悟らなければ、私たちは、知らぬ間に、自覚せずして悪魔の術中にはまってしまいます。下手すればサタンに踊らされ、サタンに振り回される危険すらあります。サタンの智慧を知らなければ、つまり敵を知らなければ、敵と戦うこともできません。よく言われることですが、ナチズム研究者がヒトラーの『わが闘争』を読んでいるのか、平和主義者が戦争のことをまったく知らないと言った具合です。^⑪

本日拝読した聖句に続く一七節に、「人びとを警戒なさい」ともあります。それは、当然ながら、羊の周りには狼が群れているからです。しかし、それだけではありません。羊の中に狼が紛れ込んでいるからでもあります。つまり、狼が羊を装って来る場合があるのです。悪魔は、聖書にも描かれているとおり、狼に羊の皮を纏わせることもできます。そうなれば、もはや外見だけでは、狼も羊も区別がつかなくなります。それゆえ、蛇のように聡くならねばならないのです。本人自身は、主観的に、そして心情的にも、羊を守るつもりでいても、実は狼を助け、挙げ句の果ては、羊を奪い散らす悪魔に手を貸し、サタンの道具になりはてる危険すらあるのです。さらに言うなら、サタンは、正義や平和、真理や光の姿さえ帯びることができなのです。

「だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」

この二つの特性をどのように併せ持つかが問題となります。蛇の聡さと鳩の柔和さとを、キリスト者の生き方の二つの楕円の焦点として、内村鑑三流に考えても良いでしょう。

パウロは、その書簡において、幼子・子どもと大人との対比のなかで、次のように伝えています。コリント前書一章一一節に「幼子だったとき、私は幼子のように話し、幼子のように考えていました。成人した今、幼子のことを捨てた」とパウロは書いています。コリント前書一四章二〇節では「兄弟たち、物の判断については子供となつてはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になつてください」と。つまり、「善にさとく、悪には疎く」です。^⑫さらにパウロの影響を受けたヘブル書の著者は、「固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によつて訓練された、一人前の大人のためのものです」（五章一四節）と語っています。成熟した大人のキリスト者にとつて、信仰と並んで、知性や理性の重要性をパウロは説いています。コリント前書二章六節に「わたしたちは、信

仰に成熟した人たちの間では智恵を語ります」と述べています。これを、成人したキリスト者、キリスト者の成人性と云って良いでしょう。鳩と蛇のそれぞれの特性を、信仰（理想や理念）と智恵（学問や社会科学）と言い換えることも出来ます。コリント前書一四章一五節には「霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で讃美し、理性でも讃美しましょう」とある通りです。

鳩と蛇の関係を、信仰（理念や理想）と理性（学問や社会科学）との関係として捕らえることもできると考えています。つまり、究極的な次元では、鳩のような信仰（理念）が妥当します。しかし、まさにこの世の次元においては、蛇のようなこの世の智恵、学問や社会科学も必要になるわけです。

私も、旧約聖書に記された約束の言葉、たとえば、イザヤ書に記された終末の美しい狼と羊、羊と蛇の関係が、イエス・キリストの到来により、彼の十字架上の死と復活によつて実現したことを信じます。つまり

「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く」（一一章六節）。さらに「狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる」（六五章二五節）。

この世において、「既に」イエス・キリストにおいて実現した神の現実、しかしながら「未だ」、この世においては完成されていません。この、「既に」と「未だ」の間の期間、この世においては、まさに今日の聖句が生きてくるのです。未だその時に至らない、究極以前の「この世」においては、事柄に即した理性や知性において考究する客観的な学問・社会科学の次元が必要とされます。

しかしもし、この説教が、あたかも理性的な学問や科学万能主義を訴えているように聞こえるのであれば、それは誤解です。なぜなら、知性や理性を駆使した学問や社会科学は、知識と認識に過ぎないからです。サタンの誘惑に抗し、悪魔に勝利できる力は、学問や社会科学にはありません。それでも私たちは、信仰や理想・理念においても、知性や理性においても、悪を知り、悪と戦わねばなりません、実に勝利するのは、イエス・キリストです。すでに十字架上で悪に勝利したイエス・キリストの信仰と智恵以外に、私たちは勝利できません。

エフエソ書の著者が、本日の説教の結論を指し示してくれています。該当箇所を引用して終えます。

「ついには、私たちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。こうして、私たちは、もはや未熟な者ではなくなり、人びとを誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」。

祈祷

天の父よ、私たちの内にキリストを形づくり、キリストの充ち満ちた姿にまで導いてください。そして私たちがまだ役立つものであるならば、私たちの兄弟であり主であるイエス・キリストの信仰と知恵をもって、どうか、この地上に使わされた使命を、四国学院で働く使命を全うさせてください。我らの贖い主であり、勝利の主であるイエス・キリストの御名を通してお祈りします。

注

(1) 本稿は、二〇一五年一月二五日、社会学部週間に話したチャペル講話に手を加えたものである。讃美歌は、四二〇番（平和）を唱和した。

(2) 抜け目のない管理人は、主人の金をちよろまかしていたが、それがばれた。主人から会計報告を求められ、悪智恵を働かせ、主人に負債のある者たちの証文を書き換えさせた。たとえ主人から解雇されても、負債を軽減させてやった者たちのところで雇ってもらえるようにとの底意からであった。

まさに、悪知恵の働く抜け目のない管理人自身に、その横領や不正をはっきりさせるための会計報告を任せてはならない。こうしたこの世の知恵も必要となる。

(3) 参考までに、福音書で *phronimos* という言葉は以下のように用いられている。

―「岩の上に自分の家を建てた賢い人」(マタイ伝七章二四節。教会口語訳では「思慮深い」)。

―「時間通り彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕」(マタイ伝二四章四五節)。

―十人の乙女「のうちの五人は愚かで、五人は賢かった」(マタイ伝二五章二節。協会口語訳では「思慮深い」)。

―「賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた」(マタイ伝二五章四、八、九節)。

―「時間通りに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人」(ルカ伝二二章四二節。教会口語訳では「思慮深い」)。

―不正な管理人の「抜け目のないやり方をほめた」(教会口語訳では「利口な」) この世の子らは「自分の仲間に対して、光の子らよりも賢く振る舞っている」(以上、ルカ伝一六章八節。教会口語訳では「利口な」、新改訳では「抜け目のない」)。

(4) 「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」(ルカ伝一〇章三節)。

(5) しかも、イエスの生涯の最期は「生け贄の子羊」として十字架に処せられた。イエスが十字架に処せられたのは、蛇のような聡さが足りなかったからではない。十字架の死を急いだり、避けたりする蛇の誘惑に対抗し、父なる神の栄光の時を悟っていたからである。

(6) 「狼は羊を奪い、また追い散らす」(ヨハネ伝一〇章一二節)。

(7) たとえば、エゼキエル書二二章二七節には、「また、高官たちは都の中で獲物を引き裂く狼のようだ。彼らは不正の利を得るために、血を流し、人々を殺す」と描かれている。ゼファニア書三章三節では、「この都の中で、役人たちはほえたける獅子／裁判官たちは夕暮れの狼である。朝になる前に、食らい尽くして何も残さない」とある。

(8) それは往々にして人からの評判を気にする自分のためです。もちろんキリスト者というブランド名に傷をつけたくないという心理も働きます。しかしそれは、神のためでも人のためでもなく、自分の理想や理念そして自分の信仰のためです。その結果、往々にして、ド・ラマと化した自分の信仰と理想や理念の傘に逃げ込み、知性や理性を放棄しがちです。

二〇一五年一月二三日(金曜日、パリで起こった同時多発テロに関して、ドイチエ・ヴェレがダライ・ラマ一四世に単独インタビューを行った(二月一九日))。その時のダライ・ラマのコメントが、世界の人びとに感動を与えた。独文と英文からの翻訳を掲載する。

「人々は平和を欲しているが、テロリストは近視眼的であり、彼らが自爆テロを行う理由の一つである。祈りを通して、だけは、

我々はこの問題を解決できない。私は仏教徒だから、祈り、(の、力、)を信じている。人間が問題を作り出してにおいて、今になって問題の解決を神に頼むことは筋違いである。神ならばこういうだろう。〈最初に問題を作り出したのは人間なのだから、自分たちで解決しなさい〉と。

我々は、調和と協調といった人道的価値を育て上げるためにシステムチックな(計画的)アプローチを取る必要がある。もし今からこれらを始めるならば今世紀はこれまでの世紀とは異なるものとなるだろう。それは、全ての人の利益であり関心事に掛かっている。それゆえ、家族や社会の中から平和のために尽くそうではないか。そして 神や仏、政府からの救いを期待しないことだ。：私たちが今日、直面している問題は、信仰や国籍といった〈表面的な相違〉の結果ではないのか。私たちはみな、同じ一つの人間なのだ」(傍点〓山崎、誤解を呼びそうなネット上の翻訳の修正訳)。

(9) 私たちは、「蛇^{だかつ}蝮(へびとさそり)の如く」と、忌み嫌いますが、ギリシャ神話でも認められるように(アスクレピオスの杖蛇、古来、世界各地で、蛇は、長い間食べなくても生きている生命力や、その脱皮から、生と死と再生を連想させる信仰の対象にもなっていました。同じような意匠のモーセの杖蛇は、その意味が異なります。ユダヤ・キリスト教では、一貫して蛇は信仰の対象ではなく、モーセにおいても蛇は克服すべき対象です。清め(衛生)や治癒・回復する力は、蛇ではなく、ひとえにヤーヴェの神からくるものであった。

(10) もしサタンが人間の内にある負の側面(罪)とするなら、人間の負の側面が罪として表に顕れ勝ち誇ったとき、実体化し、人間の墮落につながったと考えられる。そう解釈するなら、サタンは人間が食べたと同時に、善悪の木の実を食べたことになる。すると、まだ人間は、命の木の実を食べていないから、サタンも食べていない。サタンも永遠ではない。

(11) ちなみに、私は平和学メジャー(専攻)を担当しているが、そこでは、「地上において平和を構築するには、正義や公平、真善美といった崇高な〈理念〉や〈理想〉だけでは足りない。その〈理想〉や〈理念〉が間違っているのではない。また理想や理念がなくて良いと言っているのではない。理想と理念は、必要不可欠である。しかし、人間の内に棲みつくだす黒い悪をも直視せねばならない。平和学の理論や実践を学びつつ、天上と地上、光と闇を見極め、そして国内外を問わず、この地において、平和を実現する者として尽くそうではないか」をモットーにしている。

(12) 「わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています」(使徒行伝二〇章二九節)。

(13) 「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である」(マタイ伝七章一五節)。

(14) ロマ書一六章一九節。ここに使われている「さどく」は、sophistsで、パウロは、神の智恵にも使っている。同様の例は、ロマ書一六章二七節にもある。